

第四十五回 「城戸賞」 応募作品

「不眠夜行」

あらずじ

カゲイミツキ  
影井水月 (27) は今まで眠ったことがない。原因は不明。

そのせいで水月は他人に怪しまれ、孤独な日々を過ごしていた。水月はずっと眠りたかった。

水月はある日、宇宙飛行士を目指す有川望 (27) と出会う。二人は一緒にそれぞれの願いを叶える同盟を組む。と同時に、二人は徐々に惹かれあう。

水月は眠りたいという欲求が増し、気絶して眠るため、自分にスタンガンを当てたりと、狂っていく。一方、望は宇宙飛行士の二次試験に落ちてしまう。

ある日、水月は望に、眠るために自分を殺してほしいと頼む。

望は断り、互いの願いを諦めて、結ばれよう、と言う。これほど自分を信じてくれる人は初めてだったので、水月は眠ることを諦め、望と結ばれることを選ぶ。

そんな中、水月は、脳に刺激を与えて、眠ることができる治療の存在を知る。しかし副作用もある。およそ50%の確立で今までの記憶が消えてしまうのだ。水月は望を忘れたくないので、治療を断る。

そこで水月は望の秘密を知る。望は二次試験を繰り返して合格していたのだ。しかし望は、水月を一人にしないために宇宙飛行士の夢を諦める気である。水月は望の本来の願いを叶えてあげたいと思い、望から姿を消すことを選ぶ。

望は水月を探し、病院で発見する。しかしその時水月は、望のことをもう知らない風であった。望は水月が治療を受け、記憶が無くなったと思い、その場を去る。

数年後、望は宇宙へ旅立った。水月は現地でそれを見届けてから、例の治療を開始した。実は数年前、望と出会った時、水月は嘘をついていたのだ。望が夢に、100%向き合えるように。ちゃんと望が夢を叶えられるか気になっていたのだ、それまで治療を受けなかったのだ。

望は宇宙から帰ってきて、自分が乗ったロケットのドキュメンタリー番組を見ていた。そしてそこに、水月がちらっと映っているのを発見する。そこで望は水月の嘘に気付く。水月が行きそうな場所へ望は走り、二人は出会う。

手術の結果、水月は望のことをまだ覚えているのか？ 水月の表情からは、それは読み取れない。

登場人物表

カゲイミツキ  
影井水月 (27) (32) …… 礼二の妹

アリカワノシム  
有川望 (11) (27) (32) …… 会社員

カゲイレイジ  
影井礼二 (37) (42) …… 医者・研究者

クドウタロウ  
工藤太郎 (25) (30) …… 礼二の助手

カミヤリヨウスケ  
神谷亮介 (30) (35) …… 望の大学の先輩

シンジ  
真司 (27) …… 水月の元恋人

タナカ  
田中 (40) …… 会社員

スズキ  
鈴木 (48) …… 望の上司

B A Rの店主

B A Rで水月と話しているおじさん

面接官 A

怪しげなおばさん

真司と話している女の子

B A Rの店員

屋形船の給仕

タナカと話している女の子。

アナウンサー

キャスター

病院の受付

○BAR（夜）

洒落た店内。人が多く、騒がしい。

黒いハイヒール。

それを履いているのは影井水月（27）。

水月、周りをちらちら見ている。

店主が水月に話しかける。

店主「待ち合わせですか？」

水月「ううん、アイツこういうところいるかな

あつて。酒飲みだったから」

店主「……だった」

水月「そうね」

店主「見つけたら、どうされるつもりで」

水月「まず、近づくの。それから騙してもい

い、人前で恥をかかせるのもあり。あとは

……」

店主「……」

水月「ナイフでグサッ！ とやるのもよし」

店主「……」

水月「笑ってよ」

店主「すみません」

田中（40）、水月に横から近づく。

水月、横目で田中に気づく。

水月「（店主に）いないみたいだから、今日

もお仕事」

× × ×

水月、田中と話している。

田中「僕なんかのレベルになるとさ」

水月、田中の方を向く。

田中「独立しようって声はかかったんだ、十

個くらい？ ここだけの話。でもね、全部

断った」

水月「えー何ですか？！」

田中「安定だよ安定。ほら、変に起業しちゃ

ったりするやつ奴いるでしょ、最近若いの

で。ああいう奴らは上手くないかね……

僕は言いたいな、一発逆転なんて無理。君

達の願いは叶いません。身の程を知れって

さ」

水月「……」

田中「確実な成功を選んだ僕だから、（腕時

計を見せ) こういう贅沢ができるの」

水月「いいなあ私にも買ってくださいよ」

田中「これ男用だよ？ アカリちゃん欲しいの？」

水月、脚を田中の脚にそっと当てる。

水月「だってそしたら、田中さんとおそろいだし？」

田中「まあ……確かにね？」

店の奥から『田中』と声が聞こえる。

田中「……あ、ちよっと呼ばれてる」

水月「ね」

田中「ん？」

水月、店の奥を指さし、

水月「もし田中さんが今、この店から抜け出したら、あの人たち、どう思いますかね？」

田中「それは……誰と？」

○高級マンション・廊下(深夜)

上がってくるエレベーター。

エレベーターの中、水月と田中がキスをしている。

○同・田中の部屋・寝室(深夜)

田中、水月をベッドに押し倒す。

田中、そのまま水月に覆いかぶさろうとする。

しかし水月、優しくそれを止める。

田中「アカリちゃん？」

水月、薄く微笑んでいる。

田中「眠くなっちゃった？」

水月「ううん。私、眠くならないから」

田中「じゃあ——」

水月、田中の額に浮かぶ汗を指で触る。

田中「……」

× × ×

シャワーの音が聞こえる。

水月、ベッドに仰向けになって、目を瞑っている。

水月、目を開ける。

○同・一階（深夜）

エレベーターが下がってくる。  
そこに乗っているのは、水月一人。

○都心のとある道（深夜）

水月、高級財布の中を探りながら、歩いている。  
財布の中、万札が六、七枚ある。  
水月、財布から何か取り出す。  
それはキャバクラの名刺である。  
水月、ポイッと名刺を道に捨てる。  
一室だけ電気が点いているマンションの部屋がある。  
水月、それを見上げる。  
水月N「地球における、ありとあらゆる生物は」  
その一室も、電気が消える。

水月「……」

水月、煙草を吸い始め、夜の都心を歩く。  
静かな、都会。

水月N「眠る時間が、あるのだけれど」

○アパート・水月の部屋（深夜）

暗い中、目を瞑っている水月。  
水月、目を開け、溜息を一つ。  
水月N「今まで私が過ごしてきた」

○同・外観（深夜）

アパートの一室、電気が点く。  
水月N「全ての夜は、眠れなかった」

○タイトル『不眠夜行』

○街（日替わり）（深夜）

水月、高級財布の中を見ながら歩いていく。  
有川望（27）、水月の反対の歩道をジャージ姿で走っている。  
水月、望を見る。

水月「……」

○公園（深夜）

水月、歩いていると、足を止める。  
望が汗ダラダラで、ベンチに頭をつけ、  
地面に座り込んでいる。  
水月、そこを通り過ぎようとするが、足を止める。

× × ×

水月、お茶を望の額に当てる。

望、起きる。

望「え、俺……」

望、立ち上がるが、ふらつく。

水月「ねえちよつと」

望「こんなんじゃないだめだろ」

水月「え」

望「いや、そういうことじゃない」

水月「はい」

水月、もう一度お茶を差し出す。

望「いや、要らない」

望、少しふらつきながら走り始める。

水月「そんな体で走って、どこいきたいの」

望「ここじゃないとこだよ」

そのまま走っている望。

水月「何アイツ」

望「（呟き）ここじゃないとこ……」

○マンション・望の部屋・寝室（深夜）

望、ノートに文字を書いている。

望N（ノートの文字）「俺は行く。ここじゃないところへ、誰も行ったことがないところへ」

望、ノートを閉じ、本棚にしまう。

○病院・研究室く廊下（日替わり）

水月、煙草を吸いながら、影井礼二（37）と話している。

奥では工藤太郎（25）が書類を整理しながら、二人の会話を聞いている。

礼二「だめだった」

水月「だめって？」

礼二「今回も収穫なし」  
水月「……つかえない」  
工藤「すみませんここ禁煙で——」  
水月「（無視し）その何？ 医者の学会ってヤツ、ホントに機能してるの？」  
工藤「（水月に）あの——」  
水月「（礼二に）それか私に何か隠してる？」  
礼二「あーうっせーな！ こーゆーケース、お前だけだから！ 難しいんだっつてんじやん！」  
水月「……私、眠るためなら何でもするから」  
礼二「わーってるわーってる。けど、まあ」  
水月「……何？」  
礼二「諦めるって選択肢を、これから先、受け入れてもらうかもしれないぞ」  
水月「……」  
工藤「水月に近づき、  
工藤「あの、だから煙草——」  
水月、工藤に根性焼きを喰らわせる。  
工藤「（痛がり）あっつ！」  
水月、帰ろうとする。  
礼二「別にさ」  
水月、止まる。  
礼二「そのせいでなんか、人間関係悪くしたりとか、そういうの、ないんだろ？」  
水月「人間関係？」  
礼二「ああ」  
水月「私にそんなの」  
礼二「ないか」  
水月「じゃあね」  
水月、研究室を出る。  
礼二「……」  
工藤「いいんですか？ 一応合わせましたけど」  
礼二「何が」  
工藤「眠る方法、あるくせに」  
礼二「……リスク、高すぎんだろ」

○会社・デスク（夜）  
数字やアルファベットが並んでいる。プ



ログラミングのパソコン画面。

その席にいるのは望。

望、P C画面を見ず、イヤホンをつけ、

英語を勉強している。

鈴木（48）、望のイヤホンを取る。

望「はい」

鈴木「お前今日言った件ホントに断るつもりか？」

望「はい」

鈴木「もう一度よく考えろ。このプロジェクトの、リーダーの椅子の価値」

望「俺、技術屋ですし」

鈴木「クライアントの要望で、そういう奴に任せたいって来てんだよ」

望「それ引き受けたら俺、会社辞めた時、周りに迷惑かけちゃうんすよ」

鈴木「あの、あれ、N A S Aに受かったら会社辞めるって話？」

望「はい」

鈴木「あれまじなの」

望「はい」

鈴木「倍率、どんくらい」

望「…：千分の、二くらいです」

鈴木「いやいやいや、千分の二って！ て現実感、ないでしょ」

望「…：…」

### ○ B A R（夜）

水月、おじさんの隣で酒を飲んでいる。

おじさん「俺が若い時は、もっと自由に仕事できてたんだよな！」

水月、笑顔で相槌を打っている。

水月、酒を飲もうとする。

『真司さんホントですか？』という声が大きく聞こえる。

水月、手を止め、その声の方向を見る。

男の、黒い靴だ。出口へ向かっている。

その靴は、物陰や人並みで遮られる。

水月、席を立ち、声の方向へ向かう。

おじさん、水月が消えたことに気づかず、

喋っている。

おじさん「だからその時俺言ったんだ——」  
水月、人にぶつかり酒をこぼしてしまう。  
しかし水月、構わず、進む。

○同・外（夜）

外に出てくる水月。

辺りを見回す。

人は少なく、遠くにはタクシーも通っている。

水月「……」

○公園（夜）

歩いている水月、なにかを見て、立ち止まる。

望がベンチで座っていた。

水月、通り過ぎようとする。

望「あの」

水月、向こうを見る。

望「あなた」

水月、望の方を向く。

水月「私」

望「そう、昨日お茶くれた」

望、立ち上がる。

望「昨日は、その、すみませんでした」

水月「ああ」

望「ほら、俺態度悪かったから、いや、ちょっと自分もハイになってたっつーか、うん

なんか、焦ってて」

水月「……」

望「お礼しないと、悪いっすよね」

水月「……私まだ、ご飯食べてないんですよねー」

○街（夜）

歩いている水月と望。

水月「プログラミング？」

望「ああ、まあ」

水月「え、凄ーい！ 今伸びてるって聞きますよ？」

望「……あんなの、誰でもやったらすぐでき  
ますよ、あ、あれ」

望、看板を指さす。

水月「あれって結構いい店ですよね……！」  
望「いいっすよ、扱い使わなくて、金なら余っ  
てるんで」

水月「……」

二人、店の前に着く。

しかし、その途端、店の電気が消える。

水月、時計を見る。一時丁度である。

店の看板には、十二時までと記されてい  
る。

望「まじか……」

水月「あの」

望「（舌打ち） こういうミスが……」

水月「あの」

望「はい」

水月「じゃあ料理って、できますか？」

○マンション・望の部屋・リビング・寝室（

深夜）

水月、見渡す。

広い。物は少なく、整っている。

望、キッチンで料理中。

水月、立ち上がり、そこをのぞき込む。

水月「何ですか？」

望「ボルシチ」

水月「ロシアのですよ、凄ーい！ え、留

学とか行ってたんですか」

望「いや、特に」

水月「じゃーあ、誰かに教わったとか？」

望「ネットで」

水月「へーそうなんですな」

望、盛り付けていく。

× × ×

× × ×

洗われた食器たち。

望、水月を寝室に入れる。

望「寝る部屋こっちで。俺ソファなんで」

水月「……あ、はい」

水月、入り、ベッドに仰向けになる。  
水月、目を閉じる。  
水月、物音が聞こえ、目を開ける。

○同・同・リビング（深夜）

水月、うろろうろしている。望の姿がない。  
水月「……」

○同・同・寝室（深夜）

水月、急いで自分のバッグを漁る。  
財布は、ちゃんとあった。

水月「……」

水月、出したものを、カバンにしまう。

水月、電気を点ける。

水月「わっ」

部屋の中には、ポスターがいっぱい。惑星が描かれたポスターや、宇宙飛行士のポスター。

水月「……」

水月、バッグを持つ。

○同・外（深夜）

水月、バッグを持ち、辺りを見ながら歩いている。

水月、マンションの屋上の方を見る。何かがある。

水月、スマホのカメラをズームにして、屋上を見る。

水月「……」

○同・屋上（深夜）

水月、屋上に出る。

望、望遠鏡で遠くを見ている。

水月、望に近づく。

水月「プログラマーって聞いてたから……」

望、聞こえず、

望「おっ！ おお！ おお！」

水月、立ち止まる。

望「今日すげえじゃん！」

望遠鏡には国際宇宙ステーションが映っ

ている。

しかし、その像が少し曇る。

望「ん？」

望、望遠鏡から目を離すと、隣に喫煙中の水月がいた。

望「うわ」

水月の煙草の煙が、望遠鏡と空の間を遮っていた。

水月・望「……」

望「もう、夜遅いんで」

水月「プログラマーって聞いてたから、もつといいものあると思っただけど、めぼしいもの持ってないのね」

望「なんか、雰囲気」

水月「なに」

望「俺やっぱ、騙されかけてた」

水月「大丈夫。何もとってないから。宇宙飛行士を壁に貼りつける趣味無いし」

望「……ああ、ね」

望、望遠鏡をまた覗く。

水月「何見てるの」

望、望遠鏡から、目を離し、

望「……ISSって……」

水月、首を横に振る。

望「国際宇宙ステーションって言うんだけど」

水月「聞いたことあるかも、何それ」

望「えーつと、まあ、簡単に言うと（早口で）人間はまだ、宇宙にあんま行けてなくて、でもやっぱ今少しずつ遠くへ行くこうって思ってるから、地球の近くに基地を作ってるのがISS。地上から四百キロメートルキロ離れたところにあんだけど一周九十分なの、だからそこ乗ってる人は昼と夜ぐっちゃになったりして、あと中は実験モジュールと居住モジュールに分かれててその間の

水月「あの」

望「あ……ごめん、簡単じゃなかった」

水月「大体わかったけど」

望「ほんと」

水月「うん、まあ、つまりさ」

望「つまり……？」

水月「乗りたいんでしょ、あの、何とかステーションに」

望「……」

水月「分かるし。そのくらい」

望「笑っちゃうよな」

水月「……」

望「馬鹿だなーって、あんな遠くに、こんなただの宇宙オタクが行くって」

水月「全然。笑えない」

望「……でもこのこと喋ったら、よく言われるけど、現実を見る」

水月「お前には無理」

望「時間の無駄」

水月「身の程知らず」

望「そうそう」

水月「でも、行きたいって気持ちには、どうにもならない。でも、一生かけても、行けないかもしれない」

望「そう！　って何でそんな」

水月「私も同じようなもんだから」

望「ライバル？」

水月「いいや。ようなもん、って」

望「じゃあ何」

水月「……」

望「何だよ。俺だけずるいだろ」

水月、答えず。

望「言ってみなっ」

水月「……夢を見る時、そこが夢の世界って分からないんでしょ。それってどんな感覚？」

望「夢？」

水月「あと、起きた時に二度寝したいって感覚、あの感覚って、他に例えると何？」

望「……」

水月「今日はよく眠れた。それってどういうこと？」

望「そのまんまのことでしょ」

水月「私には、それが分からないんだ」

望「……」

水月「私はね、生まれてこの方、眠ったこと、ないの。でね、眠れないかもしれないの。眠る方法、見つからないかもしれないの」

望「まじ」

水月「うん、まじ」

望「……え、まじで？」

水月「なんなら証明できるけど。笑うよね。」

笑ってよ」

望「……笑っちゃ、だめでしょ。だって多分それ、本気でしょ」

水月、座る。

水月「……うん。眠ってみたいよ、本気で。」

無理かもしれないかもだけど」

望「難しいんだ」

水月「らしいよ」

望「……そういう意味では、俺ら、同類？」

水月「……かもねー」

そのまま佇む、二人。

望「……肉眼でも、見えんの」

水月「何が」

望「ISS」

望、空を指さし、

望「ほら」

水月「どこ」

水月も空を眺める。

望、水月に近づき、座る。

望「あそこだよ」

望、空に指をさす。

望「ちよつと光強いやつ」

水月「ええ」

望「煙草じゃま」

望、水月の煙草を取り、足で踏む。

水月「やめてよ」

望「ほらあれ」

水月「……」

水月も空に指さし、

水月「あれ？」

望「あれ。ほんとに見えてる？」

水月「……あのちよつと、赤いの、隣？」

望「そうそれ！」

水月「屋上に仰向けになる。

そのままの、二人。

水月「夜、ベッドに横になるの嫌で。眠れないのを、自覚する感じが」

望「うん」

水月「それがこんな屋上なら、星で紛れて少しはましになるかも」

望「国際宇宙ステーションも忘れずにな」

水月「はいはい」

望「でも今日は珍しいから、東京の空でこんななの」

水月「案外今日は、ついてたのかも」

望「は？」

水月「昼からいいことなかったから」

望「もう今、明日だろ」

水月「あー、そっか」

望「…協力、するか」

水月「協力？」

望「数少ない、同類同士」

水月「意味わかんない」

望「そっちは、眠るっていう、みんなが知ってるような感覚を、手に入れる」

水月「ああ…：ならそっちは、誰も行ったことないような、遠い宇宙へ行く」

望「そういうこと」

水月「…でも協力は嫌だ」

望「何で」

水月「協力だと、人間同士、信じあってる気がする」

望「駄目なの」

水月「気持ち悪い」

望「宇宙飛行士には絶対なれないタイプだな」

水月「でも、同盟ならいいよ」

望「同盟？」

水月「同盟なら、そういう無駄な人情とか、無い感じするし」

望「どっちでもいいけど別に」

水月「じゃあ、それで」

望「うん」



綺麗な夜空。

○試験会場・外観（日替わり）

○同・会議室

英語でディベートが行われている。

望もいる。

神谷亮介（30）が喋り始める。

望、神谷に気付く。

望「（呟き）神谷さん」

○同・面接会場

望と五人ほどの面接官が座っている。

面接官A「何で君は宇宙飛行士になりたいの？」

望「まだ十歳くらいの頃——」

○喫茶店（回想）

座っている水月と望。

望「ガキの頃、夏休み、みんなで夜近くの森を探検しようってなったの」

水月「うん」

望「で、行ったら、懐中電灯が俺のだけ切れて」

水月「運わる」

望「迷子になってフラフラ歩いてたら、でっかい平野があって、寝っ転がったら星が綺麗で」

水月「へえ、ロマンチック」

望「長い時間、蚊に刺されまくってるのも分からなくて、ずーっと見えて、そこで初めて思ったんだ。宇宙に、行きたいって」（回想終わり）

○試験会場・面接会場

望の面接が行われている。

面接官A「ではこれが最後の質問です。もし、あなたが自分の命よりも大切にしたい人がいたとします。勿論いるかもしれませんが、自分が宇宙に行くためには、その人を殺さ

なければいけなかったとしたら、仮定の話  
ですよ……あなたは、宇宙に行きますか？」  
望「……」

○同・ジム

汗ダラダラで座っている人たち。

望、その傍で、ランニングマシンの上  
を走っている。

望の隣、神谷が走っている。

二人とも、まだ余裕そう。

神谷「大学以来か？」

望、走っている。

神谷「答えろよ。どうせ俺らで、ワンツーフ

イニッシュだろ」

望「……結婚式以来ですよ」

神谷「そうだったな」

望「神谷さん確定っすよね」

神谷「何が」

望「最終行くの」

神谷「何で」

望「ダントツでしょ」

神谷「そう？ やった」

望「大学のころからそうですよね」

神谷「ここで昔話かよ」

望「覚えてます？ 人工衛星飛ばすやつ」

神谷「惜しかったよなああれ」

望「テキストに言ってる」

神谷「いや、ホントに惜しかったじゃん」

望「その言い方の問題」

神谷「そういう理由で落ちたりするかもな」

望「ないっすよ流石に」

神谷「お前だっていけるだろ」

望「最後の質問迷いました」

神谷「最後？ ああ、どっちか選べって」

望「自分より他人を優先しろってことか……

エゴを通してでも、任務を遂行する意志を

持てってことか……」

神谷「いいだろ、人それぞれで」

望「どっちにしました」

神谷「夢叶えた」

望「結婚してるのに」

神谷「あいつも俺のこと、応援してくれてんだし」

望「そうすか」

神谷「お前はとうした」

二人のランニングマシンのスピードが上がる。

望「うお」

神谷「お喋りで疲れちゃった？」

望「…余裕ですけど」

望、少し、息切れし始めている。

○同・外観（日替わり）

リュックを持った受験生たちがバスに乗ったり、車に乗ったり。

○アパート・水月の部屋（夜）

ベッドに横たわっている水月。

水月、スマホを開く。

○マンション・望の部屋・寝室（夜）

望、ノートに何か書いている。

スマホの通知音が聞こえる。

望、ノートを本棚にしまう。

望、スマホを開く。

望「眠る方法…」

○大学・入口（日替わり）

水月、望、歩いている。

水月「どこ行くの？ ちょっと」

望「母校、寝るから、マジで」

○同・大講義室

教授が話している。

生徒のほとんどが寝ている。

ぐっすり寝ている望。

起きている水月。頬杖をついている。

○同・入口

水月、望、歩いている。望は眠そう。

望「……わりいな」

水月「別に」

望「詫び」

望、バッグから睡眠薬を取り出し、水月に渡す。

水月、手で断り、

水月「こういうのは一通り試した」

望「でもこれ、よく効くんだった」

水月「いいって言ってんじやん」

望「いつか役立って」

望、水月のカバンに睡眠薬を突っ込む。

水月、抵抗するも、睡眠薬はカバンの中に入る。

○マンション・入口（夜）

望、ポストの中を見る。

何もない。

望「……」

望、ポストを開く。

○公園（日替わり）

ダッシュしている水月。

水月の先には望がいる。

水月「（息切れ）……」

望、止まり、

望「おい」

水月、力を振り絞って望の所まで行く。

望「これだけ走ったら、流石に」

○アパート・水月の部屋（夜）

ベッドに仰向けの水月。目はパッチリ開いている。

○マンション・入口（夜）

望、ポストを見る。

中に何かある。

望、急いで取り出す。

美容院のハガキだった。

望「んだよ」

○街（日替わり）

歩いている水月。

怪しい恰好をしたおばさん、水月に近づく。

おばさん「ちよつとあんた、私見えるよ、運気が下がってる。何か困ってることがあるんでしよう」

水月「……」

おばさん「安くしとくよ」

水月、おばさんを見つめるも、振り切るように歩き始める。

○マンション・入口（夕）

望、ポストを覗く。

望「……」

望、封筒を取り出す。

JAXAからだ。

○公園（夜）

を一人で歩く水月。

水月、空を見上げる。

夜空に星はない。

水月、ベンチに座る。

水月「……」

水月、スマホを取り出す。

電話帳には『真司』の文字。

水月「……」

水月、躊躇うも、真司に電話をかける。

『トゥルルル』というスマホの音。

× × ×  
二つ並んだワイングラス。

× × ×  
『トゥルルル』というスマホの音。

× × ×  
ラッピングされた箱の中に、黒いハイヒールが入っている。

× × ×  
『トゥルルル』というスマホの音。

× × ×  
水月の部屋の玄関。男ものの黒い靴と、

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

水月のスニーカー。

× × ×

『トゥルルル』というスマホの音。

× × ×

部屋で水月が誰かに話しかける。

水月「眠れないの、私」

× × ×

ブツッと切れる電話。

水月「……」

水月、次は望に電話をかける。

○マンション・望の部屋・リビング（夜）

望、ソファに横になっっている。

机には、JAXAからの封筒。封はす  
でに切られている。

スマホが鳴る。

望「……」

望、起き上がり、応答する。

部屋にいる望と、公園にいる水月の会話。

望「何」

× × ×

水月「何もないけど」

× × ×

望「じゃかけんなよ」

× × ×

水月「そっちは何かあるの？」

× × ×

望「は？……何もないけど」

机上の、封筒。

× × ×

水月「あ、そ」

○居酒屋（夜）

水月、望、顔が赤く、ぐったりとしてい  
る様子。

水月「眠れなくて、嫌だったこと？」

望「良いよ別に、話すの嫌なら。ただちよつ  
と気になっただけだし」

水月「まあ、眠れないってことを言うと、怖  
がられる。それか、怪しいツボとか、勧め

られる」

望「……」

水月「人にどう思われても、どうでもいいけどね」

望「あー確かに、気にしなさそう」

店員が来る。

望「すみません生一つ」

店員、去る。

水月「ずっと、そう思ってた」

望「え？」

水月「ずっとそう思ってたし、今も思ってる。けど、そうじゃない時があった。もし夢を見ているなら、こんな感じなのかなって時

が」

望「……」

水月「……真司はお酒が好きで。誕生日には、洒落たハイヒールなんかもくれて……で、私ちゃんと聞いたんだ。眠れないって。最初は冗談だと思ったらしいんだけど、本気で信じてくれた日があつて。で、その次の日いなくなつて」

水月、酒を少し、飲む。

水月「……いつか、帰ってくるのかな」

望「……」

水月「二次試験の結果は？」

望「二次試験」

水月「ほら、JAXAの」

望「……ああ、JAXA」

水月「出たの？」

望「いやあ……まだなんじゃない?!」

水月「そう」

望「……うん」

水月「全部上手くいくよね」

望「全部って？」

水月「私はいつか眠れるし、アンタは合格する」

望「俺は……どうなんだろ？」

水月「大丈夫でしょ。あんな頑張ってるんだし」

望「……」

水月「何」

望「珍しいじゃんそんなこと言うの」

水月「そうでもないでしょ？」

望「……ありがとな」

水月「え？」

望「ありがとう。そんなこと、言ってくれて」

水月「……じゃあ今日、払ってね」

望「じゃあってどういうじゃあだよ」

水月「そもそも誘ったのそっちだし」

望「は？ そっちだろ」

水月「え？ いやいやいや」

店は賑やかである。

○BAR（日替わり）（夜）

水月、入り、座る。

水月「（店員に）マティーニ」

水月、スマホを開いたりして、酒を待つ。

水月、奥の方で、賑やかな声を聞く。

水月「……」

水月、その席の方に、少し近づく。真司

（27）と女の声が聞こえる。

女の声「真司さんはー、そういうオカルト系、

信じるんですかー？」

真司の声「それじゃれ？」

水月、グラスを持つ手が、強まる。

女の声「違いますよーたまたまです」

真司の声「んー俺は肯定も否定もしない派」

女の声「そうなんですネー」

真司の声「あ、でもね、昔の女で、なんかち

よっとそういう奴はいた」

女の声「見えないものが見える、みたいな」

真司の声「いや、眠れないんだって」

水月「……」

女の声「眠れない？」

真司の声「眠ることができないの。最初は信

じてなかったんだけど、実際ね、そうだった」

女の声「えーそんなことあるんですかー？

こわっ」

真司の声「そうだから怖いから、早めに別れ



といた。うん、普通にやっべー奴でしょ」  
女の声「嘘つかないでくださいよー」  
真司の声「ホントだって！ ホント！ この  
前そいつからいきなり電話来て、めっちゃ  
怖かった」

女の声「何て言っていました？」

真司の声「いや出ねーよ」

真司と女の笑い声。

水月「……」

× × ×

違うBARにいる水月。

水月「まず、近づく」

× × ×

水月、真司の方を見る。

黒い靴。

× × ×

水月「それからは騙してもいい、人前で恥を  
かかせるのもあり」

水月「……」

× × ×

水月「ナイフでグサッ！ とやるのもよし」

× × ×

水月のテーブル、誰もいないが、一万円  
札が、一枚置いてある。

### ○都心の道（深夜）

早歩きで歩いている水月。

水月、途中で若い男達に話しかけられる  
も、振り切る。

### ○他の道（深夜）

一人で歩いている水月。泣いている。

### ○街（深夜）

水月、歩いている。

水月、怪しい姿をしたおばさんに話しか  
けられる。

おばさん「ちよっと」

水月、立ち止まる。

水月「……あなたに会いたかったんです」

○ビル・部屋（深夜）

怪しげな装飾。

お婆さんと水月が座っている。

水月「私も眠れるって本当ですか？」

お婆さん「だけどそれには、私が時間をかけて、非常に多くの宇宙の力を集めなければならぬのね」

水月、聞き入っている。

お婆さん「だからそれ相応のものを、用意して貰わないとね、こっちも商売だからね」

○銀行（日替わり）

大量の万札がATMから出てくる。

それを取る水月の手。

○病院・研究室

水月、礼二、工藤、がいる。

水月は煙草を吸っている。

礼二「金」

工藤「だからここ煙草——」

水月「そう、いいでしょ少しくらい、持ってんでしょ、それなりには」

礼二「何でそんなにいきなり」

水月、礼二の隣に座る。

水月「私、眠れるかもしれないの！」

礼二「……どうやって」

水月「宇宙にはね、私達人間がまだ発見できてない、目に見えないパワーが秘められているの！」

礼二「お前……」

工藤「……」

水月「でね！ そのパワーを上手く手なずけることで、ありとあらゆる人の願いを叶えることが——」

礼二「水月！」

○アパート・水月の部屋

ベッドに横たわっている水月。

○BAR（夜）

水月、酒を体に流し込んでいる。

○同・トイレ（夜）

水月、嘔吐している。

○同・外（夜）

水月、座り込んでいる。

店員「他のお客様のご迷惑になりますので」

水月「飲みまくったらさ、眠れるって、言う

じゃん普通！」

店員「ちよつと……」

水月「でもね、ぜんっぜん、眠気とか、こない。ハハハ」

店内の客も水月の方を見ている。

水月「あ、ちなみにー！ 今日お金ないから」

店員「え」

○同・外（深夜）

礼二、工藤、水月の肩を担いでいる。

水月、ふにやふにやと、妄言を吐いている。

礼二「死人みてーに重いな」

工藤「言っているいいんじゃないんですか？ こ

こまで必死なら」

礼二「……なあ、工藤」

工藤「はい。あ」

工藤、タクシーを見つけ、手を挙げる。

礼二「上の許可、必要だったよな、あの治療」

工藤「そっすね」

タクシーが三人の元に来る。

○アパート・水月の部屋（日替わり）

ベッドで横になっている水月。

○銭湯

誰も見えない。

お湯が張ってある。

お湯の中に、人の姿がぼんやりと見える。

水月、お湯から頭を出す。  
水月、ひどく息を切らしている。過呼吸  
気味である。

水月、湯からあがり、座り込む。  
水月「（過呼吸で）……」

○街（日替わり）

歩いている水月。髪の毛はぼさぼさ。  
水月、ディスカウントストアを見つめる。

○アパート・水月の部屋

ディスカウントストアのレジ袋。  
水月、スタンガンを持っている。  
水月、手が震えている。

水月「……」

水月、自分の首に、それを当てる。

水月、叫び声をあげ、倒れる。

水月、しばらく痛がっている。

水月「（悶絶）っ……」

痛みが引いたころ、水月、起き上がる。

水月「……」

水月、スタンガンを蹴る。

水月、冷蔵庫を開ける。

中にもものは少ない。

○マンション・望の部屋・リビング（夜）

料理をしている望。

水月は座っている。

望「既読くらいつけるよ」

水月「スマホ見てなかったから」

望「じゃ急に連絡すんなよ。別にいいけど」

水月「今屋上行っていい？」

望「うん、まあ。何で？」

水月「あい……」

望「ISS」

水月「そう、それ見る」

望「今日見れる日かな」

望「スマホで検索する。」

望「今日いけるわ」

水月「うん」

望「でも曇りなんだよな」

水月「見えないの？」

望「……五分五分」

水月「見えると思う？」

望「……見えないと思う」

水月「じゃあ、賭けしよっか」

望「賭け？」

水月「私は見えると思うから、もし見えたら、

私の願いを何でも一つ聞いて」

望「見えなかったら」

水月「アンタの願いを何でも一つ聞く」

望「……」

水月「乗る？」

望「の……った。肉眼で、だぞ？」

○同・エレベーターと階段と屋上（夜）

水月と望が乗ったエレベーターが上がってくる。

水月、望、降りる。

水月、望、階段を登っている。

望「なあ」

水月「ん？」

望「願いつて何」

水月「まだ教えない。そっちは？」

望「……嫌だよ俺だけ」

フツと笑う水月。

二人、ドアの前に来る。

望が開け、二人、屋上へ出る。

水月、望、空を見上げる。

空に月以外の光はない。

水月・望「……」

望「俺の勝ち、だな」

水月「何してほしい？」

望「……うーん」

水月、空を見ていて、

水月「あ見えた」

夜空には、うっすらと光が。

望「まじか」

水月「私の勝ち」

望「……なんかずるくね？」

水月「何で」

望「最初見た時はなかったじゃん、雲とか動くし」

水月「えー」

望「引き分けだな」

水月「……別にそれでいいよ」

望「引き分けの場合は？」

水月「お互いが、お互いの願いを叶える」

望「……いいよ。そっちは何」

水月「先に良いの？」

望「いいよ」

水月「……」

水月、屋上の端の方に歩き始める。

望「……」

水月、端に着く。

水月、望の方を振り向く。

水月「ここから一步踏み出せば、私は多分、眠れるけど」

望「……？」

水月「その一步が、踏み出せないの」

望「……は？」

水月「だから、私の胸をここで押して」

望「……」

水月「そして私を眠らせて」

望「……どういうこと」

水月「だってここから落ちれば、流石に眠れるよ？」

望「……本気で言ってる——」

水月「本気」

望「……」

水月「これが私のお願い」

望「……」

水月「眠らせてくれるなら、今のアンタがいいな。どうせいつか、私から離れて行くんだし」

望「そんなこと、しねーよ……?!」

望、水月に近づく。

水月「いいよ！」

望「（止まり）……」

水月「じゃあ、いい。全部一人で済ますよ……」

：大丈夫。眠れない私は、ずっとこんな感じだったから」

望、水月の元へ走る。

望「ずるいだろ！俺のも聞くんだろ？！」

水月「……じゃあ、早く言つてよ」

望「お前、おかしいから！目、覚ませつて」

水月「分からない。そんな経験、ないから」

望「……」

水月「それじゃあ、さよなら」

水月、更に端に寄り、下を見る。

望「分かった！」

水月、止まる。

望「分かったから」

水月「……うん」

望、水月に近づく。

水月、腕を背中に回す。

水月「……」

望、水月の胸倉を掴んで、水月を引き寄せる。

水月、抵抗する。

望、水月を抑えようとする。

二人は、転ぶ。

望、水月の腕を掴む。

水月、望から離れようとする。

しかし、望の腕は、離れない。

水月の力は、徐々に弱まる。

水月、ついに、諦める。

水月「……夜の、東京は」

望「うん」

水月「昼より人がいないから、一人ぼっちが

目立つの」

望「……ならさ」

水月「……」

望「俺がその夜、ずっと起きてるのっていうの、どう？」

水月「……嘘でしょ、どうせ」

望「嘘つかねえよ。お前じゃないんだから」

水月「どうせ怖がって逃げる」

望「宇宙に行く方が怖いって」

水月「……いつか、私を裏切る」

望「そんなこと、しない」

水月「……」

望「このままずっと、起きてるから」

水月「……ほんと？」

望「ほんと」

水月「……突然、消えたり」

望「しない」

水月「……」

望「落ち着いた？」

水月のお腹の音がする。

水月「お腹空いた」

望「……メシ、食おう」

水月、望、ゆっくりと立ち上がり、室内へ歩く。

○同・階段よりエレベーター（夜）

水月、望、歩いていく。

水月、望、エレベーターの前までくる。

水月、望、エレベーターに乗る。

エレベーターのドアが閉まる。

○同・廊下（夜）

水月と望が乗ったエレベーターが降りてくる。

二人、キスをしている。

○同・望の部屋・寝室（夜）

望、水月、ベッドに座る。

望、水月に近づく。

水月、望の額の汗を、なでる。

望「……シャワー」

望、水月の元を離れようとする。

水月、望を止める。

水月「いい」

水月・望「……」

○同・同・リビング（朝）（日替わり）

料理しかけてある食材。

○屋形船・船内（夜）（日替わり）



水月、望、食事をしている。

船内にはチラホラ客がいる。

水月、横の方をチラチラ見る。

水月「……」

望、そんな水月に気付く。

望「どした？」

水月「ううん」

水月の目線の先、若い女の子と田中がいる。

田中「知ってる？ あの会社の社長、株で失

敗してて——」

望「……」

田中、水月の方を、ふと、見る。

田中、なにかに勘づいたよう。

田中「……」

望、そんな田中に気付く。

水月「……」

田中「アカリ——」

水月と田中の間に、給仕が入り、皿を回収する。

望「（給仕に）外って行けますか？」

○同・甲板（夜）

船から見える夜景。

水月と望がそれを見ている。

水月「気、使ったでしょ？」

望「いや何か、知ってるっぽかったから」

水月「まあ、ちよっと」

望「大体察しはつくけど」

水月「あの仕事辞める。どこかで働くよ」

望「仕事っていうの」

水月「さあね」

水月、煙草を吸い始める。

水面に映る、月の光。

水月、それを見ている。

水月「水月って名前だからさ、ずっと思ってたんだけどほら」

水月、水面に映る月を指さす。

水月「月に水ってあるのかな」

望「最近、あるだろうって説が有力になった

の。なったんだけど、実際持ち帰ったりしてないから、確実に訳じゃなくて」

水月「じゃあ持ってきてよ。アンタが。月の水」

望「……悪い」

水月「ん？」

望「その役目、俺じゃなくなったっぽい」

水月「……残念」

望「でもよかった」

水月「強がっちゃって」

望「もし最後まで合格したら、お前と一緒にいる時間なんてなくなる」

水月「……」

船が岸に近づく。

望「……俺、宇宙のこと忘れるからさ。お前も眠れないこと、気にするなよ」

水月、吹き出す。

望「なんだよ！」

水月「なにそれ」

望「……正式なやつ」

水月「そのつもりだったけど」

望「……そっか」

水月「うん」

水月・望「……」

望、水月に顔を近づける。

田中の声「アカリちゃん！」

望、水月、田中に気付く。

望「アカリ、ちゃん」

望、水月を見る。

三人「……」

水月「行くよ」

望「え」

水月、望の手を引っ張って、船の端を逃げる。

望、最初は驚くが、状況を察し、水月と走る。

田中、追いかける。

望、給仕に一万円札を渡し、

望「すいませんこれで！」

水月、望、船から岸へ、ジャンプする。

水月、少し服が濡れてしまいが、二人は岸に着く。

田中「アカリちゃん！」

水月、望、そのまま逃げる。笑っている。

○都心の景色（朝）（日替わり）

水月の声「もし眠れたら、したいことがあったの」

○マンション・望の部屋・寝室（朝）

アラームが鳴っている。

望、起き、スマホを見る。

望、スマホを入力する。

望の声「何？」

○喫茶店・従業員室（日替わり）

水月、携帯を見る。

水月、スマホを入力し、スマホをロッカーに入れ、閉める。

水月の声「午後まで寝て、焼き鳥なんか食べに行つて」

○同・店内

働いている水月。

水月の声「空いてる映画館で一本見て、帰りは公園で、散歩したりして」

○会社・ロッカールーム

開かれるロッカー。

望、ロッカーからスマホと財布を取る。

水月の声「深夜二時くらいに、また寝るの」

望、スマホを見る。  
望、何か打つ。

○同・デスク

望の声「それさ」

望、仕事中。

○喫茶店・従業員室（夕）

水月、ロッカーを開け、スマホを取り、

見る。

望の声「寝なくてもできんじやん」

水月、何か打つ。

閉まるロッカー。

○会社・ロッカールーム（夕）

ロッカーが開く。

望、そこからスマホを取り、見る。

水月の声「確かに」

○アパート・水月の部屋（日替わり）

部屋の掃除をしている水月。

水月、黒いハイヒールを、ごみ袋へ入れる。

スマホが鳴り、水月、見る。

望の声「ならさ、眠らないからこそできると、しようよ」

○マンション・ノゾムの部屋・寝室

ゴミ袋にゴミが入っている。

宇宙飛行士のポスター。

望、ポスターを外す。

望、本棚を見る。

望、SF関係の雑誌の塊を掴み、床に置く。

本棚の一番端にある、ノート。

望、それを取ろうとする。

望、取れず、手を引っ込める。

望「……」

望、もう一度ノートに手を伸ばそうとしたところで、スマホに通知が来る。

望、スマホを見る。

水月の声「分かった。教えてあげる」

○都心の風景（日替わり）（深夜）

ビルの電気が消え、暗くなっていく様子。

○都心・歩道橋（深夜）

歩道橋を歩いている水月と望。  
人がほとんどいない。

望「こんな広かったっけ」

水月「って、思うよね」

望「思った」

水月「眠れないことで、唯一良かったと思っ  
たのが、夜の東京に出会えたこと」

望、周りを見渡す。

夜景。ビルの明かりはまだ少し、点いて  
いる。

望「昼間より、いいかも」

望、歩道橋の真ん中から、ビル群の写真  
を撮る。

水月「でしょ？」

水月、望、歩く。

○都心の道（深夜）

広い車道を小走りで渡る水月と望。

水月、柵を飛び越え、歩道へ渡る。

望は普通にまたいで、歩道へ渡る。

○渋谷・スクランブル交差点（深夜）

空いている。

水月、望、闊歩している。

○マンション・望の部屋・玄関（日替わり）  
（朝）

水月、望、外へ出るところ。

玄関にはゴミ袋がある。

望、それを持つ。

ゴミの中に宇宙飛行士のポスターがある。

水月はそれに気づき、

水月「いいの？」

望「ん？」

水月、ポスターを指さす。

望「ああ、いい。こーゆーの、これからどん

どん捨ててくから」

水月「……あそ」

水月、望、出る。

○会社・外（朝）

歩いている望、着信に気付く。

非通知である。

望、応答する。

望「……JAXA？ え、はい」

○喫茶店・外（朝）

水月、入ろうとする。

水月、着信に気付く。

礼二「からである。」

水月、応答する。

水月「……うん何？……空いてるけど」

○会社・休憩室（朝）

望「俺が？」

相手の声「二次試験合格者の中で、一人が辞

退しました。最終試験は偶数人数にて行い

たいので、話し合いの結果、あなたが相応

しいということに」

望「……あの、それ受かったら……」

相手の声「もちろん、宇宙飛行士として、ヒ

ューストンへ」

望「はい……」

相手の声「詳しい事につきましては書類にて

送付いたしますので、宜しくお願い申し上

げます。とは言っても、急なことですの

で、来月の五日までを、回答期限とさせていた

だきますが、宜しいでしょうか？」

望「……はい」

○病院・研究室

いるのは水月、礼二、工藤。

水月、煙草を吸い始める。

工藤「あのここ禁煙——」

水月「早くしてよ、私忙しいんだから」

礼二「うんあのさ、いきなり言ってあれなん

だけどさ……」

水月「早く言っよ」

礼二「……お前……眠れるかもしれない」

水月「……」

礼二「あるんだよ、眠る方法。しつかりとし

た、治療法が」

工藤、水月に近づき、煙草をとる。

水月は工藤に抵抗せず、礼二を見ている。

水月「……へえ」

○マンシヨン・望の部屋（日替わり）（深夜）

水月と望、ベッドに横たわり、話している。

望「……そうなんだ」

○病院・研究室（回想）

水月、礼二、工藤がいる。

礼二「いたんだよ。お前の他にも。一九四八年にはロシアで。八九年にはイギリスで。

二〇〇五年には中国に三人、二〇一五年には五人もアメリカで。多分、途上国には見つかってないだけ、でもっといるんじゃないかな

水月「……嘘ついてたんだ、私に」

礼二「……ま、そうなるわな」

水月「何で」

礼二「……」

（回想終わり）

○マンシヨン・望の部屋・寝室（深夜）

水月、望、ベッドに横たわり、話している。

水月「何か、脳に悪いんだって」

望「……副作用、みたいな」

○病院・研究室（回想）

水月、礼二、工藤がいる。

礼二「そう。副作用だな」

水月「何？手が動かなくなったり？」

礼二「人はどうして眠るのか。その謎は未だ分かっていない。しかし仮説はある。脳内のタンパク質がリン酸化すると、その状態を脱するために、人は眠る。眠ると、リン酸化が消える」

水月、よくわからない、と言った感じ。

工藤「ししおどしのようなものですよ」

× × ×  
ししおどしに水が落ちている。

工藤の声「起きていると、脳内のタンパク質がリン酸化していきます」

ししおどし、水が溜まり、カクン、と傾く。

工藤の声「そして眠ることで、リン酸化したタンパク質が、元に戻るのです」

× × ×  
全く水が落ちていないししおどし。

工藤の声「しかしまれに、そもそもタンパク質が、リン酸化しない人がいます」

× × ×  
話している工藤。

工藤「それがあなた。だからそもそも、眠りたいと思えない」

礼二「そこで、この治療だ。三度における薬の投与で、脳のタンパク質に、リン酸化が起きるよう癖をつける」

水月「それ、だけでいいんじゃないの」

工藤「この治療は、脳全体に影響が起きます。特に海馬。そこは記憶を司るところです」

礼二「今までの被験者は四人。内二人が、重度な記憶障害を患った。自分の名前を忘れるほどにな」

水月「……残り二人は？」

礼二「普通に眠れるようになって、それだけ。後はなんもなく幸せだ」

水月「……」

礼二「お前が受けたいって言ったら、受けさせてやる準備は、もうできてる」

水月「……」

礼二「眠りたいんだろ？」

(回想終わり)

○マンション・望の部屋・寝室(夜)

水月、望、ベッドに横たわり、話している。

望「……どうすんの。別に、俺は、そこはお



前の――

水月、望の言葉を唇で塞ぐ。

望「……！」

水月、唇を離し、

水月「ないよ。忘れるとか」

望「……」

水月「それにアンタが言ったんでしょ、お互

い望みは捨てようって」

望「……そう、だよな」

二人、抱きしめあう。

○喫茶店・外（夜）（日替わり）

歩いている水月、研究室にいる礼二と通話中。

水月「だから、言ったでしょ。私は良いの」

×

礼二「ほんと何なのお前？ あんだけ俺に急かしといてさ」

×

水月「そっちだって嘘ついてたじゃん」

×

礼二「あーはいはい」

×

水月「もう切るから」

×

礼二「待て待て」

×

水月「何」

×

礼二「お前はずっと眠りたかったんだろ？

何があつてそう思ったが知らねーけどさ、

人間そんな、簡単に変わんねーぞ」

×

水月「意味わかんない」

×

礼二「ずっと願ってたことは、そう簡単に忘れらんねーってこと」

○マンション・屋上（夜）

屋上に寝そべっている望。

望「……」  
綺麗な夜空。

○平原（夜）（回想）  
綺麗な夜空。

望（11）、草むらに仰向けになって、空  
を見ている。  
望の腕に、蚊が止まり、血を吸う。  
望はそれに気づかない。  
望、腕を動かし、蚊が消える。  
望は手を空に向けている。

望「……」  
（回想終わり）

○マンション・屋上（夜）  
屋上に寝そべっている望、手を空に伸ば  
している。

○レンタルビデオ店（日替わり）  
水月、映画を探している。  
水月、SF関連の映画を手取る。

水月「……」  
水月、それを商品棚に戻す。

○マンション・玄関  
水月、ポストを開ける。  
数枚のチラシと、大きめの封筒。  
封筒はJAXAからだ。

水月「JAXA……？」  
× × ×  
望「もし最後まで合格したら、お前と一緒に  
いる時間なんてなくなる」  
× × ×

水月「……」  
水月、封筒をチラシの間に挟む。

○同・望の部屋・リビング  
パソコンをいじっている望。  
× × ×  
インターフォンが鳴る。  
× × ×

水月が入ってくる。

水月「色々入ってたよ」

水月、封筒とチラシを、机上に置く。

望、チラシを見る。

望、封筒を見る。

封筒は、JAXAからである。

望「……ありがとう」

望、それらを、不要紙が重なっている紙の山場の上に無造作に置く。

水月「……」

× × ×

× シャワーの音。

水月、紙の山場の上に置かれた、封筒を見ている。

水月「……」

水月、目を離し、映画を出す。

望のPC、スリープモードである。

水月、マウスを動かし、PCを開く。

画面には、宇宙開発関連の記事の見出しがずらり。

シャワーの音が止まる。

水月「……」

水月、その画面を小さくする。

水月、PCに映画のディスクを入れる。

望、上がってくる。

望「入る？ 服貸すけど」

× × ×

× シャワーの音が聞こえる。

望、封筒を開ける。

中には多くの書類が入っている。

一枚目、白い紙に、『先日お電話にてお伝えさせていただいた件ですが、再度書類としてご確認ください』とだけ、書かれて

二枚目以降が、説明の書類である。

望、それらを読んでいる。

望、一旦封筒を机上に置き、レンタルビデオ店の袋を覗く。

望、中に映画のディスクはない。

望、PCを見る。

映画の再生画面である。  
望、その画面を一旦小さくする。  
するとホームに戻る。

望「……」  
望、グーグルを開く。  
すると、画面には、宇宙開発関連の記事  
の見出しがずらり。

望「……」  
望、その画面を、閉じ、ビデオ視聴の画  
面にする。  
シャワーの音が止む。  
望、風呂場の方を見る。  
望、封筒に書類を丁寧に入れる。  
望、紙の山場の一番上に封筒を置く。

望「……」  
望、封筒を紙の山の真ん中ぐらいに挟む。  
水月が風呂から上がってくる。望の服を  
着ている。

× × ×  
ほの暗い。

空っぽのポテトチップスの袋。  
PCから映画が流れている。

望、寝ている。水月に寄りかかっている。

水月、望からそっと離れる。

望の頭はソファへゆっくり落ちる。

水月「……」

水月、紙の山場の所へ行く。

水月、山場の真ん中から封筒を取り出す。

水月、封が開いていることに気付く。

水月、封筒の中を見る。

書類を読んでいる、水月。

水月、一度、望を見る。

望は寝ている。

水月、読んでいる。

水月「……」

映画の中で、銃声と悲鳴が大きく鳴る。

水月、驚き、紙を落としてしまう。

望、起きかけ、寝言を言う。

水月、急いで紙を集め、中へ入れる。

紙を入れる方向がバラバラになってしま

っているが、水月はそれに気づかない。  
水月、封筒をもとの位置に戻す。

水月「……」

水月、そつと望の元へ行く。  
すると望、半分起きる。

望「悪い」

水月「……何が？」

望「最近残業で疲れてて」

水月「……気にしてないよ」

水月、ソファに戻り、映画を見る。

水月「……」

○喫茶店（日替わり）

神谷と望が話している。

神谷「ほら、こんな感じ」

神谷、望にスマホを見せる。

望「じゃあ、神谷さんなんすね」

神谷「俺だって自分にびっくり」

望「……勿体ないっすよ」

神谷「でも、家族が増えるって聞いたらさ。

宇宙どころじゃないっつーか」

神谷のスマホ画面、神谷の奥さんが写っ

ている。妊娠している様子。

望「……」

神谷「ほら、もし本当になったら、忙

しすぎて、カミさん、一人にしちゃうだろ

？」

望「そうっすね」

神谷「俺の空いた席、お前でよかったわ。受

けるんだろ？」

望「……」

神谷「おいおいまじかよ」

望「今まで俺は、誰よりも遠くに、誰も行っ

たことないところに、行きたかったんです」

神谷「知ってるよ」

望「アイツだって自分のこと捨ててるのに、

俺だけ勝手に遠くに行って、放っておくの

っつて」

神谷「アイツ」

望「え、あ」

神谷「いいよ」

望「……俺、どうしたいんだろ」

神谷「自分の本当の願いを、確かめる方法、

教えてやるよ」

望「何すか」

神谷「いくら時間が経っても、ずっと忘れて

いられないこと。それがその人の、本音だ

と俺は思ってる」

望「……」

神谷「さてお前は、何だろうな」

○マンション・屋上（夜）

屋上に入る望。

○電車（夜）

座っている水月、スマホを見ている。

望とのトーク画面である。

『ちよっと早めに着くかも』という水月のメッセージ、既読はついていない。

○マンション・入口（夜）

水月、インターフォンを押そうとするが、

住人がマンションを出て、扉が開く。

水月、マンションに入る。

○同・望の部屋・外（夜）

水月、望の部屋のインターフォンを押す。

応答はない。

水月、ドアノブに手をかけてみる。

ドアが、開いた。

水月「……」

水月、入る。

○同・同・寝室（夜）

ベッドに横たわる水月。

その目線の先には、本棚。本は数冊ある。

本の背表紙。小説や、簡単なビジネス書

など、さまざま。

一番端に、ノートがある。

水月「……」

水月、起き上がり、それを取る。  
表紙には何も書いていない。

水月「……」

水月、読む。

望の声（ノート）「今日は十二年ぶりに、JAXAが宇宙飛行士の求人かけた」

○同・屋上（夜）

望遠鏡で宇宙を見ている望。

望の声（ノート）「やっと来たチャンス。これを逃せば、次いつあるかは分からない。絶対に負けられない。今日から試験が終わるまで、このノートに夢の日記をつけようと思う」

○同・ノゾムの部屋・寝室（夜）

ノートを読んでいる水月。

望の声（ノート）「今日は英会話とランニング。名詞を省略した喋り方をされると分からなくなるのが弱点だと気づけた。もっと頑張らないと」

水月「……」

望の声（ノート）「宇宙開発の現場の文化はアメリカとロシアが基盤と聞いている。だから今日はロシアの料理を習った。意外と、難しい」

○会社・デスク（回想）

鈴木と話している望。

望の声（ノート）「今日は上司に、JAXAの試験を受けることを話した。多分本気にされていない。だけどそんなの、構わない」

○道（夜）（回想）

走っている望。

望の声（ノート）「時々、夢を叶えた人と、そうでない人の人数の差に、怯えることがある。だけど、俺は行く。ここじゃないところへ、誰も行ったことがないところへ」

○マンション・屋上（夜）（回想）

屋上で仰向けになっている水月と望。

望の声（ノート）「今日は、不思議な人に出会った。多分いい人ではないけれど、その人は、俺の想いを馬鹿にしない人だった。その人の願いも、叶うといい」

（回想終わり）

○マンション・望の部屋・寝室（夜）

ノートを読んでいる水月。

望の声（ノート）「今日は、面接があった。最後の質問の意図が、よくわからない。自分の命よりも大切にした人が出て、自分が宇宙に行くためには、その人を殺さなければいけないとしたら、どちらを選ぶか……迷ったけど、俺は——」

水月、ノートを閉じる。

水月、ノートを元の場所に戻す。

水月「……」

○同・外

水月、マンションの屋上を見る。

人影が見える。

水月「……」

水月、スマホを取り、望とのトーク画面を開く。

水月、『行くの明日でいい？』と入力し、送信。

水月、去る。

○アパート・水月の部屋（日替わり）

水月、ベッドに仰向けになっている。

水月、そのまま、宙を見ている。

水月「……」

○マンション・望の部屋・寝室（深夜）

机上にある飲みかけのコーヒー、二杯。

水月、望、ベッドで横になっている。

望「この前は悪いな」

水月「え？」



望「映画。途中で、寝たから」

水月「だから、別にいいって」

望「今日は寝ないから」

水月「……」

望「カフェイン、とったし」

水月「……そう」

水月「……でも、足りないかもね」

水月、コーヒを少し、口に含む。

水月、そのまま望にキスする。

望、驚くが、水月に応える。

そのままの、二人。

望、そのまま水月に触れようとする。

水月、それを手で制す。

望「……」

水月「あのね」

望「……何」

水月「私は普通になりたくて、望は特別にな

りたい。一見違うようで、でも凄く似てる」

望「……どういうこと？」

水月「最初に望に会った時、安心したの。一

人きりだった私が、何だか同類を見つけた

感じがして」

望「……」

水月「実際に、私の孤独を救ってくれて」

望「……水月？」

水月「だからこそ望には、正しい方を選んで

ほしいの。私は多分、夢みたいなものだけか

ら」

望「全然、意味わかんねえんだけど」

水月「それでいいの。独り言」

望「……」

水月「アイスが良かった？ コーヒー」

望「なんで？」

水月「だって」

水月、望の額の汗をなでる。

望「……」

○同・同・風呂場（深夜）

シャワーを浴びている望。

望、ウトウトしてくる。

○同・同・寝室（深夜）

シャワーの音が聞こえる。

水月、仰向けになっている。

水月、体を超こす。

○同・同・風呂場（深夜）

横になり、眠っている望。

シャワーが止められる。

○同・外（深夜）

水月、歩いている。

○都心（深夜）

水月、歩いている。

水月、カバンから睡眠薬を取り出す。望に貰ったものだ。半分ほど、使われている。

水月、それを道にポイッと捨てる。

そのまま歩く、水月。

水月「……また、一人じゃん」

○病院・研究室（日替わり）

いるのは水月、礼二、工藤。

礼二「だから言ったろ？」

水月「そうね。今回は礼二の言う通りだった」

礼二「色々サインしてほしい書類あるから、ちよつと待ってろ」

水月「うん」

礼二、出る。

水月「やっと眠れる」

工藤「……本当に、それだけですか」

水月「どういう意味？」

工藤「もしかして、何かを、忘れたいとか」

水月「……鋭いかも、それ」

○マンション・望の部屋

望、電話をかけている。

繋がらない。

望「……」

○会社・デスク  
P Cをタイプしている望。  
望、手が止まる。

○同・休憩室  
望、電話をかけている。  
応答はない。

○マンション・望の部屋・リビング（日替わり）  
ソファに横たわっている望。

望「……」  
電話が来る。  
望、すぐ応答する。

望「水月！ お前さ！……え……あ、すみません……大丈夫です。返事、はい、分かっています、明日までですよね、書類で、はい……」

電話が切れる。  
望、紙の山から封筒を取り出す。  
望、封筒の中から書類を取り出す。  
書類の入れてある向き、順番はばらばらである。

望「……」  
水月「だからこそ望には、正しい方を選んでほしいの。私は多分、夢みtainなものだから」  
× × ×

望「……あいつ」  
× × ×

○公園（夕）  
辺りを見て走っている望。  
望「どこ住んでんだよったく」

○都心（夜）  
望、辺りを見ながら走っている。

○マンション・望の部屋・リビング（深夜）

PCをタイプしている望。

○病院・外（日替わり）（朝）  
スマホを見ながら歩いている望。

○同・受付（朝）

望、受付と話している。

望「（スマホを見ながら）ここに影井礼二さん  
んっってお医者さん、いますよね」

受付「はい、影井ならおりますが」

望「その妹さんの、水月さんって人来てませ  
んか？」

受付「すみません、どなたさまですか」

望「影井水月さんの……恋人です」

受付、望を怪しい目で見ると、

受付「少々お待ちください」

望、ソファに掛ける。

水月、自販機で飲物を買っている。

望、水月を見つける。

望「水月」

望、水月に近づく。

望「おい……」

水月「……私に、何か」

望「……」

水月「……何ですか」

望「……」

水月「誰ですか」

『影井さん！』と声が聞こえる。

水月「……すみません」

水月、望の元を離れる。

望「……」

望、病院を出る。

○マンション・望の部屋・リビング

机の上に置かれた封筒。

望、書類に記入している。

望「……」

面接官Aの声「ではこれが、最後の質問です」

○試験会場・面接会場（回想）

面接官A「あなたが自分の命よりも大切にしたい人がいたとします。勿論いるかもしれませんがせんね。自分が宇宙に行くためには、その人を殺さなければいけなかったとしたら、仮定の話ですよ……あなたは、宇宙に行きますか？」

望「……俺は、宇宙に行きません。絶対に」  
(回想終わり)

○会見会場(日替わり)

T『5年後』

多くの記者たちが集まっている。

ステージには十名程度の人。

その中に、望(32)もいる。

望「半年と、短い期間ではありますが、宇宙開発の最前線にいるものとして、全力を尽くして参りたいと思います」  
フラッシュがたかれる。

○種子島(日替わり)

人が沢山いる。

報道関係者が多くいる。

アナウンサー「発射まであと三十分時間を切りました。種子島から宇宙飛行士が飛び立つのは初となっております。更にその中には日本人の有川望さんが！」

○都心

モニターに映るニュース番組。

ここではキャスターが解説している。

キャスター「今回発射される有人ロケットは、発射から三日後、国際宇宙ステーション、ISSドッキングします」

○JAXA・管制室

静かに画面をみている管制室の人々。

○病院・研究室

礼二(42)と工藤(30)、タブレットで中継を見ている。

アウンサー（画面内）「十、九、八、七、六、五、四、三、二、一……」

画面には、ロケットが飛ぶ映像が映る。

礼二「……成功？ 成功？」

工藤「ですね、成功ですね、成功」

礼二「（笑顔で）おお、おお！」

工藤も笑顔。

### ○種子島

皆、拍手をしている。

水月（32）もいる。

水月「（上を見て）……」

そのままの水月。

拍手が止んでくる。

水月、礼二に電話する。

水月「……あー、そっちも見てるんだ……分かってる？ 私帰ってきたら、受けるからねあの治療。この前は直前で断っちゃったけど、今度こそ。え、何で今かって……だから、ちゃんと上手くいったか確認したかったの、あの時の同盟が……そう、礼二には分からないこと……記憶？ いいのもうそんなのは。運任せで」

水月、電話を切る。

水月、歩く。

ロケットが飛び立った、空。

### ○病院・外観（日替わり）

#### ○同・病室（夕）

望、寝ている。

神谷（35）が入ってくる。

望、神谷の方を勢いよく向く。

望「神谷さん」

神谷「起きてたんだ」

望「いや、来るかなーって思ってた」

神谷「ほんとかよ」

望、体を起こす。

神谷「どうだった、半年間の搭乗」

望「疲れしました」

神谷、笑う。

神谷「体まだ動かないのか」

望「一応リハビリ期間なんすよまだ。でも十

分くらいは走れますよ」

神谷「全然じゃねーか」

望「あと、眠いつす」

神谷「よく言うもんな。宇宙から帰ってきた  
らずつと眠いつて」

神谷、カバンからお菓子を出す。

神谷「お見舞い」

望「別に病気じゃないのに」

神谷「いいよいいよ。それよりさ、見ようぜ、  
約束してたやつ」

× × ×

タブレットに有人ロケットのドキュメン  
タリーが映っている。

それを見ている望、神谷。

ナレーション「今まで日本人で宇宙を体験し  
たのは十一人。彼らから直接学んだことは  
何かあるのでしょうか？」

画面に望が映る。

望「あ」

望、自分を指さし、嬉しそう。

神谷「お」

望（画面内）「コミュニケーションの大切さ  
ですかね。ISSには、国も文化も違う人  
たちばかりなので、彼らとどう早く円滑な  
コミュニケーションをすることができるか、  
教えてくださいました」

画面が種子島に変わる。

望「めっちゃカットされてんじゃん」

神谷「もつと喋ったの」

望「もう二時間ぐらい」

ナレーション（画面内）「打ち上げ当日、日  
本中からたくさんの方が集まりました」

神谷「そう言えば今日夜、ISSが見られる  
ぞ」

望、窓の外を見る。

望「でも曇りっすよ」

神谷、窓を眺め、

神谷「んー、五分五分、かな……」  
望「ですね……」

画面には、種子島現地の風景。

望「……」

望、画面を止める。

神谷「……どうした？」

望、十秒戻す。

望、再生ボタンを押す。

望、また画面を止める。

望、二秒くらい、また戻す。そこでストップする。

望、画面をじっと見る。

神谷「……望？」

望「……あいつ……あれ………ウソ、かよ……」

神谷「……どした？」

望「……神谷さん、ずっと前、言ってきましたよね。時間が経っても、忘れていられないこと。それが人の、本音だ、みたいな」

神谷「言ったっけ？」

望「それが二つじゃだめですか？」

神谷「……は？」

望「願いが二つあったら、欲張っちゃだめすか？」

神谷「うーん、上手くいくか分かんねーけど、いいんじゃない？」

望「……すみません、俺さつき嘘つきました」  
神谷「嘘」

望「神谷さん来ると思ってた、起きてたんじゃないです。あれ、違う人です」

神谷「じゃあ、誰？」

望「……詐欺師」

神谷「は？」

望「それも、かなり悪いタチの」

望、立つ。

望「ちよつと……その人、探してきます」

望、病室を出る。

神谷「ちよつ、え、お前、体……」

タブレット画面の端、水月の姿がある。



○アパート・水月の部屋（夕）

時計は十七時をさしている。アラームが鳴っている。

水月、寝ている。

水月、アラームを手で止める。

水月、しかしまだ眠たげ。

水月「……」

水月、一気に体を起こし、伸びをする。

○公園（夕）

望、辺りを見ながら走っている。

望「……」

○焼き鳥屋（夜）

水月、一人でビール片手に焼き鳥を食べている。

○マンション・屋上（夜）

望、入る。

誰もいない。

○映画館・廊下（夜）

映画が終わり、退場している水月。

○公園（夜）

望、走っているが、くたくたで、過呼吸気味である。

望、ベンチに行こうとするも、地べたに座り込んでしまう。

望「……」

そのままの、望。

近くにある自動販売機、ボタンが押される。

望「（辛そう）……」

望の背中に、ペットボトルが当たる。

望「……」

望、振り向く。

水月が、いた。

水月・望「……」

夜空。光っているものがあるが、それが

I S S  
かどうかは、  
分からない。

終